

研究

アラスカの歴史産業交通の概況

(下)

H T 生

米國領有後のアラスカ

米國領有後のアラスカに對する合衆國當局の最初の處置は極めて變則的であつた、南東アラスカとコデアツツ島に米國軍隊のバラックが建設して聯邦政府代表として僅少の軍人が駐在して居たがこれも最初のうちだけにて十年も経過すると撤退をなし、數年間はシトカに駐在したる海軍が管理して居たのである、この期間も過ぎるとアラスカは行

政官廳も軍隊も存在しないと云ふ極めて變則的の狀態に置かれて居たのである、而して千八百八十四年に通過したる基本法に依つて漸次行政體制は整備されてアラスカ地域の測量も行はれて住居法等が制定されたのであるが、其後ルーズヴェルトの保守政策やウイルソンの統治時代に種々の経過を辿つて千九百六年に至つてテリトリイとして公認されて其の翌年には米國議會下院に一名の代表者を送ることが出來たのである。又地方議會の開設を見るに至つてジュ

ノールにはアラスカ政廳が置かれてその長官は地方知事と呼ばれて大統領から任命されるが國務長官の支配を受けると共に州知事に比較して其の權限は遙かに少ないのである、即ちアラスカ地方に實施される法規の運用監視、部下職員の指揮監督、地方民兵の召集解除、地方議會に教書を送り議會通過法案の否認、教育の指揮監督、アラスカ地方政廳の中央への報告公證人の任命等の權限である、而して地方議會は二年毎に開會せらるゝが上下二院制度となつてゐる、米國領有後の重要な國際的問題は海獸捕獲に關する、米英國の紛争とパンハンドル地方の境界問題であるが、ベーリング海豹狩獵取締權の問題の如きも同全域の主權を固守した米國の態度とこれを否定して一般領海説を主張せる英國の態度との對立を招致して漸く巴里で開催された仲裁裁判で一應解決を見たが、パンハンドル地方はカナダに接境して居るのでクロンダイク地方の金鑛發見を契機として境界問題は俄然活潑化して米英間に紛糾を招いたが遂に六名の公平有能なる法律家に依つて組織されたる委員

會によつて英國側のオルヴァー・ストン卿は米國側に投票して米國側の主張に殆んど近い國境線が決定されて解決を見たのであつた、要するにアラスカが米國の領有となつた後に於いてもアラスカの經濟開發はクロンダイク・ユーコン・ノーム等のゴールドラッシュは別として極めて微温的であり、只だ金、毛皮、鯨等の掠奪的産業は領有以來二十億弗の利益を生んだと云はれてゐるが、現世紀になつてからホームステッド法又は木材輸出法炭田借地法、或るひは油田法等が夫れ／＼施行されまた行政上の位置も確立して來て兎も角アラスカが形式的にも合衆國の領土として體制が出來たのは二三十年來のことである。

アラスカの鑛物資源と林業

アラスカの産業に付いてはこの地は寒帯ではあるがこゝ數十年來莫大なる掠奪經濟を保證し來ただけあつて、鑛物資源にしても金、銀、白金、石炭等に於いて相當莫大なる埋藏があるのみではなく鐵、石油、鉛、銅、亞鉛、アンチ

モニー等を持つてゐる。更にアラスカは單に礦物資源のみでなく、魚類毛皮木材等の收穫もまた多大である、殊に鮭類捕獲と罐詰産業は例の金資源に劣らぬこの地の重要資源の双壁たり得るのである、林業の如きも、製紙パルプに有望なる將來を持ち、又未知數ではあるが農業必ずしも悲觀的ではなく、養狐等は土地柄頗る成功と云つてよいのである、茲にアラスカに於ける前記礦物資源中最も有名なる金について見ると、アラスカと云へばノームやフェアバンクス、ゴールドラッシュを思ひ出せる程金を多量に存在してゐる、アラスカの金は金鑛と砂金鑛から採れるが、明治二十六年から昭和十三年までの四十五年間に六千萬ドルの金を産出してゐる、又銅の産額は二億二千七百三十萬ドルに達してゐるが、最大の銅産地はランゲル山南麓のケニョット銅山であつたが、これは昭和十三年に廢坑となつてゐるこの他に南東アラスカにも銅山があつて現在尙ほ未調査の埋藏地もある、石炭は相當多く分布しまた廣く互つてゐるが、品質は多様にして泥炭から無煙炭までであるが、輸

出に便利なるところはなくマタヌスカ河流域は石炭の産地として知られてゐるが、何れも地方的需要に應ずるのみである、而して主として鐵道用又は暖房用、船舶用とされてゐる、石油は近年約十五萬トン五千萬ドルの全産額であるが、石炭同様に運賃労働維持費等かさむために採算的には行かぬやうである、米國が豊富なる資源を誇るうちでも當面の問題を解決するに困る資源の一つは我が大東亞共榮圈内に大半を産出する錫であるが、アラスカは米國唯一の錫産地である、併乍らその量は米國が態々溶解設備を造つた程にも達して居ない状態である、それでも近年約千五百トン價格にして百五十萬ドルが米國へ送られて居るのである、其他白金はプリンス・オブ・ウエル島のカサアーン附近又はセワード半島の砂金鑛からも採取されてゐるが、銀は千二百萬ドル、鉛は二百萬ドル程産するが、現在では共に採金業の副産物である。アラスカの林業はセワード半島アリユーンヤン列島、それに極地平原を除いた地方は森林で蔽はれてゐるが、樹種は樅、樺、アラスカ杉、紅杉、ア

メリカ梅等であつて、材積は八百四十七億六千萬立方呎にしてこの内トンガス國有林及びチュガチユ國有林が主要部であり、毎年約十億立方呎を伐採してゐるが米國本土の林業に依つて未だ十分の開発は見ざるも木材は無限に豊富であり加ふるに豊富なる水力電氣と共に利用されたらパルプ製紙工業發展は非常な有望のやうである。

アラスカの資源は如何に豊富か

アラスカの農業は學者達や米國政府當局者は農耕可能地として廣大なる地域を想定して居るが事實は可成りの無理であると共に各住地は隔絶してゐる關係上と人口は極めて少ないので原産地にて消費する以上必要がないから従つて農業の進歩發展は期待出来ない状況にある、毎年百萬ドルの農作物が輸入されてゐる現状である、農作物の内最も適するのは馬鈴薯根菜類等であるが其の他にも小麥、大麥、ライ麥、燕麥等良質なるものが得られるとのことであるが現在は全く農業は不振である、海産に至つてはアラスカは

最も重要な資源である、即ち明治十三年から昭和十三年までの五十八年間に鮭の罐詰、鮮魚、防腐魚、甲殻類、海豹毛皮、鯨油等の水産物總額は十一億七千萬ドルに達してゐる、現に千九百三十六年の生産は五千二百七十八萬三千餘ドルにてノルウエー、フランスの上位にある實にアラスカ經濟の大宗は漁業即ち海産物にある、これは黒潮の流れる太平洋はベーリング海を含めて、鯨、鯨、鯨等の好漁場であるからである、アラスカの家畜は馴鹿で中央高原地方及びベーリング海沿岸、極地平原で馴鹿したのであつたが、環境要件に適したために迅速に繁殖して現在では百萬頭以上の大群に増大してゐる、肉は冷凍して米國に送られ年額百十萬枚の皮と一億五千萬ポンドの肉が供給されてゐる、又南東及び南西のアラスカの島々アリニューシヤン列島には狐、貂、を半家畜的に飼育して毛皮を供給してゐるが、一體毛皮はアラスカに歐米人來航の目的であつたために濫獲の結果激減したが夫れは海豹が中心であつた、現在に於ては臘納獸が過半を占めてプリビロフ島が有名なる繁殖

地である、内陸では貂、獺、熊等も豊富であるが養狐業も盛になりつゝある、千九百三十六年までにアラスカから輸出された毛皮類は約一億萬弗餘に上つてゐる、茲にアラスカから米國合衆國へ輸出された物資について統計を見る

と。
 アラスカより合衆國へ輸出 千九百三十七年度
 水産物については、合計四九七、八四〇、三二〇弗となつてゐる内譯は、

鮭	四四、二三六、八〇〇 ^弗	魚	油	二、一八五、八九五 ^弗
大 鮪	一、二四一、三六八	魚 肥料		七二九、八四〇
貝 類	六六九、五〇九	鯨	油	二七四、一三八
鯨 類	一五四、六六九	鱈		二七、八三七
鯨 肥料	二二、三七五	其他水産物		二九七、八四〇
金 屬 について 合計	二五、六四九、四〇四 ^弗	となつてゐる		
内譯は、				
金	一七、七七六、四〇一 ^弗	銅		六、九三八、四三八 ^弗
銀	四二六、四二九	錫		一八一、九三九
鉛	一三四、九七五	其他金屬		一九一、二二二

研 究

木材毛皮等については合計三、二二〇、七四六弗となつてゐる内譯は、

毛 皮	二、九一三、七一八 ^弗	製 材	一〇〇、八三五 ^弗
厚 木	四九、四四二	馴鹿肉	一二〇、三〇〇
其 他	一三四、七二一		

この全部の總計は七八、七〇〇、四七一弗である、又再輸出は米國産輸入品は一、八四一、八九〇弗にして外國産輸入品は七三、七九〇弗となつてゐる。

而してこれを米國がロシアから買収以降アラスカが米國に輸出せる物資の價格は千九百三十七年までに二十億四千弗の巨額に達して丁度露國からの買収費の三百倍に及ぶのである、これを見ても現在のアラスカは如何に大資源を持つてゐるかは判明すると共にアラスカ買収の當時拭ひ去れない愚擧との悪評であつて馬鹿と嘲つたセワードは現在の敵國の生れで米人であるが、明察であつたと思ふのである。

アラスカの鐵道と道路

借てアラスカはかゝる豊富なる資源を持つてゐるに拘ら
 ず比較的その開發の遅々たるは交通關係即ち運輸上の諸
 設備が整つてゐないことに原因するのであると云はれてゐ
 るが、現在では航空路と自動車道路が整備されたと雖も尙
 ほ諸物資の輸送に必要な航路及び鐵道は未だ未發達の狀
 態に置かれてあることは否定出来ないのである、アラスカ
 の鐵道はゲナイ半島のセワード港からアンカレーヂを経て
 フェヤバンクスを繋ぐ國營鐵道たる所謂アラスカ鐵道が布
 設せられてある、この鐵道は大正四年に起工して同十一年
 には全線四百六十七哩が開通したのであるが、この鐵道は
 スレトナ河を溯つて、マツキンレー國立公園の東部の分水
 嶺を越えてフェヤバンクスに達するのであるが支線數本を
 加へると約五百三十哩に達するのである、而してこの支線
 中でマタヌスカ河谷の炭田に通ずるものが重要資源開發線
 であるが、又コルドハを起點とするカツパ河を横切つてミ
 リオンダラの大鐵橋の冒險的大工事をなした百九十六哩の
 カツパ河北西鐵道線があるがこれが僅かに内陸に通ずる交

通線である、スカグウェイから加奈陀領のホワイトホース
 に至るユーコン鐵道線もあるが、肝要の内陸交通路はホワ
 イトホース、ドーンソン、フェヤバンクスを結ぶユーコン河上
 の航路に委任されて恰も十一月から四月の七ヶ月間は全然
 不可能の狀態にある、これ等鐵道の汽車賃の如きは合衆國
 内の鐵道運賃の約二倍から三倍の高さにあるが故に旅行者
 は交通費が相當高價につくのである。而して道路はバルデ
 ツツからフェヤバンクスに至る即ち延長四百十哩にして十
 哩乃至二十哩毎に驛停のあるチャードソン公道があつて夏
 期には定期バスがこの大道の上を走つて居り汽車賃の約半
 額で乗客を運んでゐる、米國から西部カナダを横斷してア
 ラスカに至る大道路の築造は、十年前から眞剣に考慮
 せられて其後の調査報告も結了して其の必要は強調され又
 豫算に計上されてゐたが、この大道路の築造には先決問題
 としてカナダ側の同意を得るのにあつたが、米國議會は時
 局の急展に伴つて昭和十五年六月の議會に於いて本土とア
 ラスカ連絡軍用道路の建設を上程したのである、而してカ

ナダと共同の立場に立つ現在に於ては急速この道路の建設に着手したのである、この大道路は全路線二千三百哩其の幅員は二十四呎にてこれが工費二千五百萬弗を計上してゐるが、其の内千百哩は既成道路を利用することになつてゐる、路線は合衆國のシャトルを起點としてフレザー河に沿ひプリンス・ジョージに至り、これからマツケンジ河の支流リアド河溪谷を辿つてホワイトホースに出て、これからタナナ河谷に直行してフェアバンクスに至るのである、又米加共同委員會で審議された別案にカナダ鐵道に沿ふてエドモントンからロツキ山脈を横斷してアラスカに通ずる軍用路を新設して以て直接アラスカを東部工業地帯に聯絡せんとするの計畫であるやうである。

道路の特徴と航空關係

アラスカと空路との關係は航空の安全を脅かす不斷の濃霧、暴風、極地的の夜などもあつてこれ等の空路悪條件から航空路を確保するためには不斷の不時着場を作ることには

必要である、軍事的重大なる意義を持つシャトル・フェアバンクス更にノームに至る太平洋自動車幹線道路建設、この道路が一ヶ年を通じて常に毎時六十五軒の速力を以て自動車を走らせることが出来るのであるが、道路の特長はその位置が海岸線から非常に隔つてゐるために主に谷を通り高山を越えてゐないのと霧と雨の少ない地方を通るので航空にとつては都合がよいのである。シャトルからフェアバンクスを経てセワード半島のノームに至る航空路の開始は日常物資の輸送旅行者に便宜を與へるのみでなく、太平洋防衛上重大なる意味を持つてゐる、一躍國防の前哨に早變させたアラスカでは二十五の航空會社と百三十の着陸地が出來て年二萬乃至三萬の旅客と三百萬封度の貨物と五十萬封度の郵便物が輸送されてゐたのはこゝ數年以前であつたから現在では數倍されてゐるやうに思はれる、更にアラスカの都市について一寸と觀察すると、人跡未踏の高山、氷原の連なるアラスカの如きところでは小都市とは云ふもの却つて都市の意義は相對的で重要であると云はれてゐる

が、全く夫れであり各々産業及び交通の要地に發生せるものであると共に廣大なる戰爭地域の中では不可缺の基地たる資格を持つてゐる、アラスカの都市は殆んど海岸に多く漁業の中心又は鑛山の中心或は製材等の産業中心にあつて水道、電氣、無電、學校、教會、旅館、商店等都市の施設は先づ一通りは整つてゐる、又無線電信は都市以外にも多く分布してゐる有様である、南東アラスカは米本土にも近く氣候條件も良好なるがためにアラスカ總人口の三分の一はこの地方にある、この地方の主たる町はケンカシ・ウランゲル・ピーターズバーク・ヂュノー・シトカであるが、この地方は平地に乏しいので巨材を海に組んだり又は海岸を埋立て家屋道路をその上に造つてゐる、又アラスカ本土の南縁をなして内陸への門戸をなすアラスカ灣岸地方にはコルドヴァ・ベルデツツ・セワード・アンカレージ等の都會がある、ベリリング海岸ではセワード半島に集つてゐるが、即ちノーム・ベセルがあり、又ユーコン河流域にはイーグル・タナナ・フェアバンクス各都會があるが

これ等の都會中に於いてジュノーはシャトルから八百海里の距離にあつて海上よりすれば四日の行程であり、アドミラルティ島と本陸との間の海峡に臨む要港である、人口は約四千を有してアラスカ政廳はこの地にある、フェアバンクスは嘗てこの地を襲うたゴールドラッシュは一躍萬餘の人口を算へる都會であつたが、其の時代がすぎると現在は人口約三千に激減してゐるが内陸における軍事上交通上の核心的都市であるアラスカ國有鐵道とリチャードリン國道の終點であり、又ユーコン水運の中心地である、而してこれも又アラスカ陸軍の基地となつてゐる。茲に本稿を了へるに當つて吾人のアラスカに對する觀察は米國は近時この地を非常に重要視して以て軍備的諸施設をなしつゝあることである、現にアラスカは數年以前までは米國は僅かに數百名の陸軍兵をチルクイトに駐在せしめ、數臺の飛行機がシトカに常置されてゐたのみであつた、然るに近年に及んで矢繼早に軍備を計畫してゐるのである、これは今やアラスカは米本土の防衛前哨地として變化したのみではなく、

アラスカの位置は持久戦の最後の對日攻撃コースの一つとして米國は企圖してゐると見られるのである、従つて米國の軍事的前哨としての役割を買つて出たアラスカの現状を認識して置くの必要があると思ふのである。果然本稿を終るに當つて大本營發表「五月三十日十七時」はアジアへの橋……アリューシャン列島中のニア諸島の主島であるアツツ島の戦況について。

アツツ島守備隊は五月十二日以来極めて困難なる状況の下に寡兵よく優勢なる敵に對し血戰繼續中五月二十九日夜敵主力部隊に對し最後の鐵槌を下し皇軍の神髓を發揮

せんと決意し全力擧げて壯烈なる攻撃を敢行せり爾後通せんなく杜絶全眞玉碎せるものと認む。

云々とありキスカ島は確保しありとアツツ島の皇軍玉碎を傳へたが、吾々國民はこの悲壯極まりなき報を聞いて、彼の大楠公が湊川の戦死にも比すべき、千古不滅の愛國精神を發揮されたる皇軍將兵に對する無限の感謝と敵米に復讐の念に燃ゆるのである。今や世界は有史以來空前の大戦と激動を到るところで最中である、吾々の北方の守りは只だ單にアツツ島一つの問題ではないが、併乍ら米國の北方に對する意圖は那邊にあるかは首肯さるゝのである。

